

美人画研究会 活動報告 (2019年12月～2020年2月)

「明治～昭和の洋画家・岡田三郎助の資料閲覧会」
 2019年12月11日 (水) 17:00～19:00
 ポーラ文化文化情報センター (品川区西五反田)

岡田三郎助は明治から昭和にかけて活躍した洋画家で、着物姿の日本人を洋画で描き、独自の美人画を創作しました。日本初の美人コンテスト (明治41年・1908年) の審査員も務め、百貨店のポスターや雑誌の表紙絵を描くことで、新しい美人像を生み出していきました。

ポーラ文化研究所内ポーラ化粧文化情報センターでは、三郎助の書籍をはじめ、同時代の女性の写真資料等を数多く所蔵しています。閲覧を申し込んだところ、同研究所学芸員で日本顔学会会員の富澤洋子さんが快く引き受けてくださいました。

(※こちらの研究所での閲覧は事前の予約が必要となります。)

当日は定員の10名が参加し、富澤さんの解説のもと、当時の日本髪模型や貴重な資料を手にとって拝見させていただきました。絵画作品集、写真集、広告、ポスターなどに見られる当時の様子に、みな魅了されてあっという間の2時間でした。



「第22回美人画研究会」Bタイプ
 2020年2月9日 (日) 14:00～16:00
 浜松町レンタルスペース

A / アカデミックタイプに、C / クリエイティブのワークショップを交えた、Bタイプの会 (Beauty, Between等) が、畑江麻里さんの主催で開催されました。前半は畑江さんによる

「浮世絵にみる小野小町ー鈴木春信《風流やつし七小町》を中心にー」の発表と、顔学会会員・アートデザイナー東観崎 綾さんによる「福笑い de ベッピン誕生！」のワークショップが行われました。

「小野小町」は世界3大美女の一人に数えられる平安時代の美人で、第21回の描画テーマでもありました。浮世絵でも絵師たちがさまざまな小野小町の絵を描いていて、そのエピソードなどを畑江さんが数々のスライドとともに解説してくれました。

「福笑い」は、第17回のクリエイティブで顔パーツ配置の黄金バランスを教えてもらったものを、今一度アカデミックの参加者の方にも体験していただけるように簡略化して教えていただきました。東観崎さんが美しい顔パーツのカットアウトを人数分をご用意くださり、バランス線の位置に糊で貼るだけで美人顔が作れました。

後半は畑江麻里さんと稲垣進一先生 (浮世絵学会常任理事・コレクター) による広重の浮世絵に関する発表でした。まず畑江さんが「歌川広重と西洋の画家たち」と題して、印象派の画家たちがどのように広重の浮世絵を自分の作品に取り入れていたかということ、小物、背景、構図と分類して、わかりやすく解説してくれました。稲垣先生は、「歌川広重の美人画」ということで、名所絵などの風景を得意とする広重が美人画も描いていたこと、その作品をスライドで紹介くださり、ご自身のコレクションを参加者にご披露くださいました。バラエティ豊かで楽しい研究会となりました。(松永伸子)



編集委員会だより

「ニュースレター」は、第72号より装いも新たに、フルカラーでお届けします。2月25日、現編集委員会の体制となってからは初めての試みとして、オープン参加を募っての編集会議を、東京・資生堂汐留オフィス PITにて開催しました。(写真は菅沼会長撮影) 非会員の方も含め、3名参加いただき、ニュースレターの役割から内容構成、さらには発信方法まで活発な議論が行われました。そのうちカラー化への提言は、さっそく今号より実現することができました。

編集委員会では会員のみならず、日本顔学会の旬な情報をお届けしたいと考えております。日本顔学会も設立25周年、今後ともニュースレターをどうぞよろしくお願い申し上げます。(引き続き、編集スタッフ募集中です！) (富澤 洋子)



J-FACE NEWS LETTER

日本顔学会ニュースレター 72号

21 MAY 2020 Vol.72 <http://www.jface.jp>

Contents

- P1. Now the Face
- P2～3. 化粧文化研究者ネットワーク 活動報告 / 第58回イブニングセミナー / 日本顔学会若手交流会 活動報告
- P4. 美人画研究会 活動報告 / 編集委員会だより



第54回
 今、感じさせる
 KAOの人物を紹介する

特殊メイクアーティスト
江川 悦子 さん
 Egawa Etsuko

【プロフィール】
 米国ロサンゼルス在住中、Joe Blasco Make-up Center、Dick Smith Advanced Make-up Courseにて特殊メイクを学び、その後「砂の惑星・デューン」「ゴーストバスターズ」「キャプテンEO」などの映画作品にスタッフとして参加。1986年帰国後、特殊メイクアップ、特殊造形でのバイオニア的工房、株式会社メイクアップディメンションズを設立、現在に至る。直近の代表作に「シライサン」、「麒麟が来る」。

日本の特殊メイク界を牽引している江川悦子さん。映画やTVドラマ、CMを支える掛けがえのない存在だ。工房に入って真っ先に目に飛び込んできたのは壁一面に飾られた俳優さんたちのライフマスク。人工皮膚を作成するための土台としてとったものだ。架空のキャラクターや、リアルな動物像など、多様な作品に囲まれながら、メイク表現にまつわるお話をうかがった。

初は実習生としてスタート。練習としてつくったE.T.の指などから次第に技術が認められ、仕事を任されるようになっていった。憧れの巨匠リック・ペーカー氏にも師事した。ハリウッドの活気溢れる一時代に江川さんは実地に研鑽を積み、日本人の特殊メイクアーティストの第一人者となる。

■「どうやると、これができる？」
 江川さんがこの道に入った背景には、強い探究心があった。映画『猿の惑星』の猿たちが喋るリアルさや、『狼男アメリカン』で人体が狼へと変貌するさまを見て「いったいどうやるとできるのか」、興味をかき立てられた。探究心を抱え、特殊メイクの専門学校にすすんだ。授業は基礎技術のみで半年ほど、修了後は技術もキャリアも自ら開拓していくことが必要だった。最

■日本流の特殊メイク
 帰国して日本人への老けメイクをする難しさを感じる。凹凸の少ない平面的な顔に自然になじむシワをつくることには試行錯誤したという。カルチャーについても違いを感じた。姿勢を大きく変えるまでして徹底的に役をつくりこむのがハリウッド流とすれば、日本では役者が誰かがわかることが好まれるという。そのために江川さんは、面影を残す、という。その人らしい特徴要素 (必

ずしも形態的な逸脱量ではない) や、鼻や目など視線を集めるところの要素を活かすそう。日本人の骨格と役者の個性を活かす、江川さんの手掛けるいわば日本流の特殊メイクは、顔研究の視点からも非常に興味深い。

■役と一体になる

江川さんが目指すメイクの一つに「正統派の老けメイク」がある。理想像はディック・スミス氏による『アマデウス』のサリエリだそうだが、その人物が歩んだ人生を写し出すエイジングメイクだという。

役柄の理解はイメージづくりに不可欠だ。台本を読み込み、監督らと話し合いイメージを作っていく。たとえば、苦労が多

かった人生であれば深いシワがふさわしい、精悍な印象を出すために坊主メイクの青剃り感や剃り込みのラインを調整する。「納得して気持ちを向わせ、役として造る表の顔と内にある役者さんとが一体化し、集中して演技できるようにすること」、それが特殊メイクアーティストの使命だという。

江川さんの探究心は止まるところを知らない。ふだんから、人の顔を見ながら印象の源を分析してしまうという。客観的な分析のため、ご自身の顔の3Dモデルも10年毎につくるそう。豊かな表現が引き出される背景には、飽くなき探究心と、鋭い観察眼で蓄積された脳内データベースがあるようだ。「匙加減で印象が変わることがたまらなく楽しい」と江川さんはくたくなく笑った。(写真:松永 伸子・文:高野 ルリ子)

化粧文化研究者ネットワーク 活動報告

第52回研究報告

「毛髪再生医療 薄毛・脱毛治療の歴史と最前線」

日時:2019年9月13日(金) 14:00~16:30

講師:岸本 治郎 先生 (株)資生堂 グローバル
イノベーションセンター 再生医療開発室長)

場所:大阪樟蔭女子大学 小阪キャンパス

講演者の岸本先生は、髪の毛を研究し続けて20年以上で、資生堂ライフサイエンスセンター毛髪科学研究所長等を経て現職の、日本における毛髪再生医療の第一人者である。講演では再生医療だけでなく毛髪全般についてお話をうかがった。

薄毛、脱毛症は医療と美容の境界領域に位置付けられ、死に至るような重篤な疾患ではないが、外見が大きく変わるため、精神的な苦痛を伴い、性別を問わず社会生活に深刻な影響を及ぼす。毛髪再生医療は、サイエンスとして確立された



最先端の学問領域(発生物学)でもある。

壮年性脱毛症(AGA)の日本人男性の発症率は30代で20%、40代で30%、50代で40%であるが、実は薄毛の人も毛髪数は意外と変わらないというデータが示された。本数が減っているのではなく太さが見た目に影響を与えていて、毛包組織は残っているが毛包がミニチュア(細毛・産毛)化しているということだった。

植毛については、自毛を植える技術が開発されていて、後頭部の毛が残っているところをざっくり切り取って千本単位の毛包を1本ずつ田植えのように植えていく技術がある。

岸本先生がおこなっている再生医療は6mmくらいの小さな皮膚組織から10本単位のごく少量の毛包をとり、細胞を培養してから、薄毛になっているところに増やすため質量ともに植毛とは違う。最新の研究では毛包組織の中にある毛球部毛根鞘細胞(DSCC)が毛包誘導能力を有すると考えられていて実用化を目指している。男性の脱毛症には治療薬はあるが、女性にはないため抜本的な解決策として注目されている。

討議では、がん患者の女性にとっては乳房切除より脱毛のほうが苦痛という話や、ネイティブアメリカンに薄毛がないのはストレスがないから?、また、ハゲという表現は気にする人がいるから使わないほうがいいのではないか、など活発な議論がされた。

再生医療は山中教授のiPS細胞の発見以降、国をあげての研究の支援がされている分野で実用化に大きな期待が寄せられていることがわかった。(野中 聖治)

第58回イブニングセミナー「似顔絵って何だ?」

「似顔絵を楽しむ」シリーズ第3回

日時:2020年2月26日(水) 18:00~20:30

講師:斎藤 忍 先生

尚美学園大学講師(似顔絵TVチャンピオン)

場所:多目的スペース-秋葉原T-space II

私はオーディオメーカーに勤務するインダストリアルデザイナーでした。そのオーディオメーカーを退職してウェブデザイナーになったのが1998年。そこで、まず自分のホームページを作ってPRする必要があり、その中の「何か面白いコンテンツ」として有名人の似顔絵のページを作ったところ、

あるときYahoo! Japanのクールサイトに取り上げられたのをきっかけに、インターネット関連の雑誌から掲載依頼が次々と来るようになりました。そして1999年と2001年の2回、TV東京の似顔絵TVチャンピオンに出場し、2回目にはチャンピオンになることができました。

もともとインダストリアルデザイナーだったので絵を描くことが仕事でもありました。デザイナーは実在しないものを想像して絵を描いていたのに対し、似顔絵は目の前にあるモデルを見ながら描けば良いわけです。そういう意味ではデザイナーをやっていたころのストレスから開放されて絵が描け

たというわけです。また学生時代に描いていた油絵のスキルも再び活かされることになりました。

今回のセミナーでは、似顔絵というものの目的や意義、アートとの関係などを説明させていただきました。また、似顔絵クイズを交えての作品紹介やワークショップなど、様々な角度から似顔絵というものへの捉え方も紹介させていただきました。その全てをこの誌面では掲載しきれないので、似顔絵を描く上での重要な心構えの一つを以下に紹介します。

…実は、絵を描く人のほとんどが、モチーフを観察しないで頭の中のスキーマ(大まかな概念)だけで描いています。本来はモチーフを10秒見たら1秒筆を動かすのです。それだけ観察することが重要なのです。ところが多くの人はモチーフはチラ見するだけで紙の上を見ながら長時間筆を動かしています。これでは観察していることにはならず、スキーマだけ



が紙の上に描かれてしまうのです。スキーマをOFFにすることで、きっと皆さんも「似ている似顔絵」が描けるようになることでしょう…。(斎藤 忍)

日本顔学会若手交流会 活動報告

■第18回定期交流会

2019年3月23日、アニコム先進医療研究所にて古橋剛先生、徐貺哲さん、瀬尾昌孝先生の3名の登壇者を迎えて最新の顔研究に関する研究発表会を実施しました。古橋先生からはペットの顔特徴と印象の因果関係、徐さんからは相手の顔を見るとき動作と相手に抱く印象の因果関係、瀬尾先生からはフォーラム顔学2018の興水賞受賞研究のその後の発展について、それぞれご講演いただきました。予定していた時間を大幅に超過するほどの活発な議論が展開され、充実した講演会となりました。



■第19回定期交流会

2019年7月13日、資生堂グローバルイノベーションセンター(S/PARK)にて、資生堂の山南春奈さんと東京大学の高橋翠先生を講師に迎え、2件の研究発表とS/PARKの見学会を実施しました。山南さんによるメイクアップにおける錯視効果に関するご発表と、高橋先生による乳幼児育児におけるタッチケアの実態に関するご発表では、今回も活発な議論が展開されました。また、オープン間もないS/PARKの見学では貴重な資料と共に資生堂の製品開発に対するこだわりを拝見でき、参加者にとって非常に貴重な体験となりました。



■フォーラム顔学2019

フォーラム顔学2019では交流会の活動報告と共に、交流会メンバーによる共同研究発表を2件行いました。研究発表では、私(徐貺哲)と瀬尾昌孝先生による心理学×人工知能のコラボ研究と、同じく瀬尾昌孝先生と武藤祐子先生による人工知能×美容のコラボ研究について発表を行いました。いずれも異なる分野の専門家のコラボレーションにより実現した研究であり、学際豊かな顔学会の良さが発揮された研究発表となりました。次回、フォーラム顔学2020に向けて、また新たな取り組みに挑戦していきたいと考えております。

(徐 貺哲)

